様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年 １０ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２３０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１０８８２

研究課題名（和文）治療中のがん患者のセルフケア能力とストレングスモデルの融合型看護プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Nursing Program Integrating Self-Care Agency and Strengths Models for Cancer Patients under Treatment

研究代表者
吉田　久美子（Yoshida, Kumiko）

高崎健康福祉大学・保健医療学部・教授

研究者番号：７０３２０６５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：「治療中のがん患者のセルフケア能力とストレングスモデルの融合型看護プログラムの開発」に向け、がん患者のセルフケア能力尺度(吉田・神田)を活用した看護プログラム(案)を作成し高崎健康福祉大学倫理審査の承認を得た。その直後にコロナウイルスの感染が拡大しデータ収集が困難となったことから、上記の看護プログラムに関してがん患者の『希望』を考慮する看護を強化するため、研究テーマ「がん患者の『希望』に焦点をあてた看護研究の動向と課題－セルフケア能力との関連の考察－」に取り組み、国内外の51文献を対象に研究結果の概要をカテゴリ化し5カテゴリ12サブカテゴリが形成され、国内の専門雑誌へ掲載が決定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「治療中のがん患者のセルフケア能力とストレングスモデルの融合型看護プログラムの開発」に向け『希望』を考慮する看護を強化するため、研究テーマ「がん患者の『希望』に焦点をあてた看護研究の動向と課題－セルフケア能力との関連の考察－」により国内外の51文献を対象に結果の概要をカテゴリ化し5カテゴリ12サブカテゴリが形成された。カテゴリ【希望の内容】【がん患者が希望を持ち続けるプロセス】等が形成された。特に【希望の内容】とがん患者のセルフケア能力の［がんの存在にとらわれないよう思考を和らげ進む能力］（吉田・神田）との関連が考察され、がん患者の希望とセルフケア能力を支援する看護の構築の重要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：For "Development of a Nursing Program Integrating Self-Care Agency and Strengths Model for Cancer Patients under Treatment," we created a nursing program (draft) utilizing the Self-Care Agency Scale for Cancer Patients (Yoshida and Kanda) and obtained approval for ethical review at Takasaki University of Health and Welfare. Immediately after that, the coronavirus infection spread, making data collection difficult. The research results were categorized into 5 categories and 12 subcategories based on 51 domestic and international references. The paper was accepted for publication in a Japanese journal.

研究分野：がん看護学

キーワード：がん患者　セルフケア能力　希望

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究課題「治療中のがん患者のセルフケア能力とストレングスモデルの融合型看護プログラムの開発」のため，がん患者のセルフケア能力尺度（Yoshida、Kanda,2017）を活用した評価研究に倫理委員会より承認を得た（承認番号・第 1964 号）。その直後に COVID-19 の感染拡大によりデータ収集が困難な状況となり，以下の視点の必要性を確認し取り組んだ。

研究の背景

がん治療は長期にわたり，また通院治療を受ける患者が増加しており，患者にはセルフケア能力を活用し副作用症状を管理することが求められている（Yoshida、Kanda,2017）。また，看護師が患者の希望を支援することにより患者はセルフケア能力を最大限に発揮し，がんサバイバーとしての生活の構築に前向きに取り組んでいけるのではないかというとらえ方がある。このような背景から，がん患者の「希望」とセルフケア能力は相互に影響すると捉えられ，セルフケア能力の向上に向け「希望」に焦点をあてた看護の検討が重要と考えた。

治療期のがん患者のセルフケア能力には【自主的に判断し保健行動を形成する能力】,【がんの存在にとらわれないよう思考を和らげ進む能力】,【人とのつながりを保ち社会生活を調整する能力】などが含まれる（吉田・神田, 2012）。これらの能力は，治療を継続し生活を再構築するために重要であり，さらに患者が「希望」を持ち続けることにもつながると推察できる。そのため，今後のがん看護においては患者のセルフケア能力とともに患者の「希望」を考慮し看護を構築していく必要があり，その看護は「希望」をキーワードとした近年の研究結果や動向をもとに積み上げていくことが重要である。

２．研究の目的

「がん患者」と「希望」をキーワードとした国内外の文献の研究結果を体系化することにより，がん患者の「希望」に関する看護研究の動向と課題を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

1)用語の定義

「希望」の定義

希望とは，目的到達あるいは目標達成の欲望によって特徴づけられた精神状態であり，その目的や目標は，欲望あるいは探求することで得られるという期待に結びついている（Travelbee, 1974/1986）。また，患者は一人残らずいくばくかの希望を持ち続け，とりわけつらい時期の心の糧としていた（E,キュブラー・ロス,2009）。上記の特性をふまえ，本研究では，がん患者の希望とは未来に対して感じる肯定的な感情および生きるための心の支えとなる思いや欲求とする。

2)研究方法

(1)検索方法

論文の出版年の期間を 2010 年～2021 年で 11 年間とした。国内文献は医中誌 Web 版と，CiNii で論文タイトルに「希望」と「がん患者」を含む論文とし，海外文献は CINAHL と Pub Med，PMC で論文タイトルに「hope」「cancer patient」が含まれていることと，言語は English に限定し検索した。さらに該当条件として，研究対象をがん患者は小児期以外の患者とし，研究目的をがん患者や家族の希望と看護に関して設定された文献とした。

(2)対象文献の選択

検索の結果，国内文献は 22 件と海外文献は 48 件がヒットした。計 70 文献の対し，一次スクーリングとしてレビュー文献と研究対象が小児期のがん患者の文献は除外し，二次スクリーニングとして事例研究を除外した。最終的に国内文献は 17 件，海外文献は 34 文献の合計 51 文献を対象文献とした。

(3)分析方法

各文献の概要として掲載年，研究筆頭者名，研究テーマ，調査国，研究目的，研究方法では研究の種類と対象者，分析方法を抽出しレビューシートに入力した。さらに研究目的に対する結果の概要に注目し，概要の類似性をもとにカテゴリ化によってサブカテゴリ名を生成し，抽象度をあげカテゴリ名を生成した。

４．研究成果

4-1.結果

1.掲載概要の動向

51 件の対象文献において掲載時期別の文献数は，2014～2017 年の期間が最も文献数が多く、国内文献 7 件（13.7%），海外文献 16 件（31.4%）の 23 件（45.1%）だった。研究の種類は，国内文献では質的研究の方が多かったが，海外文献では量的研究の方が多く掲載されていた。全体では量的研究は 30 件（58.8%），質的研究は 20 件（39.2%），量的・質的の両方で分析された研究は 1 件（2.0%）であった。

2.がん患者の希望に関する研究結果の概要

がん患者の希望に関する研究結果について意味内容をもとにカテゴリ化した結果，51 文献から 5 カテゴリ，12 サブカテゴリが生成された。カテゴリ名は【　】で以下に示し，サブカテゴリ名は≪　≫で，対象文献の研究結果のカテゴリは「　」で示す。

1)【がん患者が望むことと生きる姿勢】

【がん患者が望むことと生きる姿勢】は，≪体調につきあい生活を送ることを望む≫，≪大切な人の幸福を願い，つながりを深めることを望む≫，≪自分の価値観を深めることを望む≫，≪生き方を見つめ自己の発達を促すセルフケア能力の活用≫などが形成された。

≪体調につきあい生活を送ることを望む≫

3 文献が含まれ，それらは治療中のがん患者が生活や健康に対して望む内容として質的研究から示されていた。板東,他（2020）の研究によって，術後回復過程にある肺がん患者の希望の体験として「残された肺とともに生きる」「今ある症状はそのうち治る」などの望みが明らかになった。

≪大切な人の幸福を願い、つながりを深めることを望む≫

このサブカテゴリには 3 文献が含まれ，Mok，et al.（2010）の研究から，進行がん患者の希望には「社会的サポートを得ること」や「大切な人の幸福を願うこと」があり，また，川端（2015）の研究で緩和ケア外来に通院している患者の語りから，他者によって自分自身の存在意義が明らかになる「つながりの意味づけ」があった。

≪自分の価値観を深めることを望む≫

このサブカテゴリには 6 文献が含まれた。Mok，et al.（2010）の研究では，進行がん患者が経験した希望に「制御されている感覚から積極的に離れること」があった。川端（2015）の研究で緩和ケア外来に通院中の患者から「私で在り続けることの肯定」などが望みに含まれることが示された。

≪生き方を見つめ自己の発達を促すセルフケア能力の活用≫

このサブカテゴリには 9 文献が含まれ，田中（2012）の研究では，転移・再発後の患者は「生きられる時間を意識する」と自己の発達を促すことを結果として導き出していた。

≪不安を抱えながら生きる≫

和文献の 2 文献と海外文献の 1 文献が含まれた。板東ら（2020）はがん患者の体験には「手放しで喜べない現実を生きる」ことを捉え,不安と共に生きる状態を示していた。

2)【がん患者が希望を持ち続けるプロセス】

【がん患者が希望を持ち続けるプロセス】は，≪診断時から苦痛と希望を持つ経験≫と≪進行がん患者の希望のプロセス≫から形成された。

≪診断時から苦痛と希望を持つ経験≫

海外文献の 2 文献が含まれ，Abby，et．Al．(2018）は患者の苦痛と希望のスコアについて，診断時の希望の得点が高いほど，その後の苦痛は低下したという変化を捉えていた。

≪進行がん患者の希望のプロセス≫

このサブカテゴリには国内文献と海外文献の 4 文献が含まれ，それら質的研究と量的研究の結果から，変化のプロセスや特徴を明らかにしていた。三部，他（2019）は再発期の肺がん患者が希望を見いだすプロセスについて「見え隠れする死との向き合い生き方の転換を迫られる」体験から始まり，「自己を立て直し闇の中で光に気付く」段階を経て，「光から見いだした希望を抱く」過程を辿っていた。

3)【がん患者と介護者の療養に関する意向】

【がん患者と介護者の療法に関する意向】は，≪今後の療養に関する患者の意向≫と≪介護者の希望に関する背景≫で形成された。

≪今後の療養に関するがん患者の意向≫

このサブカテゴリには 5 文献が含まれ，Adolescent and Young Adult（AYA）世代の意思決定や Advance Care Planning（ACP）に関する患者の意向に関する結果が含まれた。内藤，他（2016）の研究では，がん患者の ACP の希望時期は治療中，あるいは転移が判明した時，ホスピスの施設への入院時や主治医が適切と判断した時に希望すると捉えていた。

≪介護者の希望に関する背景≫

このサブカテゴリには 3 文献があり，介護者の心的外傷後成長（Post-traumatic Growth: PTG）などと希望との関係が主な結果として得られていた。Nouzari，et al.(2019）の研究では，介護者の PTG と社会的支援および希望の間には有意な正の相関が認められ，希望は社会的支援に比べ PTG に高い影響を与えていたことを結果として得ていた。

4)【がん患者の希望の影響要因とその特徴】

【がん患者の希望の影響要因とその特徴】は≪身体的・心理的要因との関係≫，≪社会的背景との関係≫，≪自己寛容や思考との関係≫から形成された。

≪身体的・心理的要因との関係≫

このサブカテゴリには 8 文献が含まれ，希望と心理的状態に影響する要因を明らかにした研究が複数あった。Peh,et al．(2017）は，患者の希望は不安や抑うつ状態の低下と相関し，感情抑制はより高い不安と落ち込みと相関していたことを明らかにした。

≪社会的背景との関係≫

このサブカテゴリには 3 文献あり，対人関係や社会的役割機能と希望の関係を示していた。Laurie,et.al．(2018)は，より多くの日常的な希望を報告した患者はより高い社会的・役割的機能を報告したことを述べていた。

≪自己寛容や思考パターンとの関係≫

このサブカテゴリには 7 文献あり，患者の自己寛容と希望との関係，希望と PTG との関係が明らかにされていた。Joao，et.al．(2016)は，進行がん患者のレジリエンスと希望の間には強い相関関係があることを結果として得ていた。

≪終末期がん患者の希望の要因≫

このサブカテゴリには 2 文献が含まれ，終末期がん患者の希望に影響する要因が特徴づけられた。Bozena,et.al.(2020) の研究から，終末期患者で気分が不安定な人は安定している人に比べ，より強い感情的で動機的な希望を持つ傾向があると明らかにされた。

5)【希望を支えるためのケア】

【希望を支えるためのケア】は，≪希望を支えるケアの視点≫，≪看護介入の実態と尺度開発≫から形成された。

≪希望を支えるケアの視点≫

このサブカテゴリには 3 文献あり，全て国内文献であった。渡部,他（2017）は，緩和的リハビリテーション看護を実践している看護師を対象にした質的研究から，緩和的リハビリテーション看護には「希望を紐解く関わり」「希望と現実に対する患者の折り合いへの関わり」などを捉えていた。

≪看護介入の実態と尺度開発≫

文献は 6 文献あり，国内の 1 文献の質的研究以外は海外の量的研究によって介入の効果や尺度開発についてであった。看護介入の実態に関してはLisa，et.al．(2014) の研究から，再発がん患者への心理的介入によって希望とマインドフルネスはともに増加していた。そして，尺度開発に関してはTone，et.al.(2018）の研究から，Herth Hope Index（HHI）の心理測定の 7 項目のスケールは，モデルに対する項目の適合性，許容可能な一次元性，人物の適合度の許容範囲，十分な分離度と項目関数の差がないことが示された。

4-2.考察

【がん患者が望むことと生きる姿勢】には≪生き方を見つめ自己の発達を促すセルフケア能力の活用≫などが含まれ，がん患者の希望には，がんに負けず前向きに生きたいという思いや日々の生活時間に含まれる楽しみを創造すること，そして周囲の人との絆や幸福を願い，さらに生と死を線状にとらえた見通しをもつことも含まれるという特徴があった。これらは,「がん患者のセルフケア能力（吉田・神田，2012）」の大表題『生き方を見つめ自己の発達を促す能力』の表題〔人生で大切なことと向き合う能力〕と関連し，患者が生き方を前向きに模索しながら療養している点において共通していると考察できる。そして，がん患者の希望の≪体調につきあい生活を送ることを望む≫≪大切な人の幸福を願い，つながりを深めることを望む≫≪自分の価値観を深めることを望む≫という状態に向け生きる姿勢としてセルフケア能力を活用していると推察できる。そのため，今後のがん看護において，患者の希望に向けた支援と共にセルフケア能力の『生き方を見つめ自己の発達を促す能力』などを支援する看護についても検討し構築していくことが重要と考える。がん患者の希望に焦点をあてた看護プログラムの構築が今後の課題であり，セルフケア能力との連動も考慮することが治療期の看護には特に重要と考える。

4-3.論文の掲載

上記の研究は「がん患者の『希望』に焦点をあてた看護研究の動向と課題－セルフケア能力との関連の考察－」としてまとめ，日本看護研究学会誌への掲載が決定した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 吉田　久美子	４．巻 －
２．論文標題 「がん患者の『希望』に焦点をあてた看護研究の動向と課題－セルフケア能力との関連の考察－」	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本看護研究学会誌	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中川　裕 (Nakagawa Yuu) (00828600)	高崎健康福祉大学・保健医療学部・助教 (32305)	
研究分担者	福島　直子 (Fukushima Naoko) (10593717)	高崎健康福祉大学・保健医療学部・助教 (32305)	
研究分担者	神田　清子 (kanda Kiyoko) (40134291)	高崎健康福祉大学・保健医療学部・教授 (32305)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関